

滋賀県 「水土里ネットびわこ揚水」～水環境イノベーター～

役員：24人、職員：5人(非常勤5人)、組合員：1,885人、受益面積：1,216.7ha

1. 地域の概要

水土里ネットびわこ揚水の地域は、滋賀県の琵琶湖東南部の近江八幡市に位置し、湖東平野の中心に広がる。

地域の農業は、経営規模が5ha以上の農家戸数が増加傾向を示している。また、専業農家が増加する一方、第2種兼業農家が減少傾向となっている。このような状況を背景として、本地域では、認定農業者が増加し、かつ集落営農組織への集約化が進んでいる。現在、これらの組織は、法人化への移行が進み、オペレーターによる作業受託方式や共同作業方式など、集落を中心とした大規模化が進められている。

2. 取り組みの背景、きっかけ

21 創造運動の取り組みは、平成20年に滋賀県の補助を受けて官民共同で行った「節水型水利用システム実証支援事業」への取り組みが背景となっている。この事業は“水資源の有効利用が農業系負荷を低減させて西の湖の環境保全に寄与し、併せてコストの低減を可能にする”との視点から、節水かんがいの取り組みを行うもので、受益農家及び官民に加えて学識経験者を含む「節水型水利用組合」を立ち上げて節水かんがいの啓蒙活動を行い、近江八幡市浅小井地先(4号分水工51.3ha)をモデルほ場とし、排水路に循環かんがいポンプを設置してその効果を検証した。その後、節水かんがいの取り組みを地域活動の一環として推進すると共に、これと並行して農業系負荷と西の湖の水質環境との因果関係の明確化を目的とする産官学共同実証事業を平成22年より立ち上げ、今日に至っている。

3. 運動の基本理念等 『:きれいな西の湖をとりもどそう』

西の湖及びその周辺地域は、古来より、「春色」安土八幡の水郷として、琵琶湖八景の一つに数えられ、水と緑に恵まれた美しい景観と歴史風土に恵まれた地域である。このため、西の湖に接する本地域も西の湖の環境保全に役割を果たす必要がある。「節水かんがい・循環かんがい」を推進し、地域内の排水路を通じて西の湖へ流入する農業系負荷の削減を図る取り組みを行う。

○循環かんがいの推進：地域内の基幹排水路に「循環ポンプ」を設置し、水田からの排水を水利施設(管網パイプライン)に注入して再利用を図ることにより、西の湖への農業系負荷の流入を削減する。

○節水かんがいの推進：水資源の有効利用と農業系負荷削減の観点から、組合員の理解と協力を得て「節水かんがい」を推進し、コストの削減(特に、揚水ポンプの電気料金負担の軽減)を目指す。

○西の湖の生態系の保全活動の推進：農業系負荷の低減だけではなく、西の湖へのゴミ流入防止(結果的には水土里ネットに流れ込む)のために環境団体との連携や組織化を図っていく。また、次代を担う子供たちや集落の一般地域住民に対しても、環境学習会や水質に関する勉強会を開催して啓発活動などを実施していく。

4. 主な運動の概要(開始年)

①内部運動

○“きれいな西の湖をとりもどそう” 協議会、委員会(H20)

②外部運動

○“きれいな西の湖をとりもどそう”

- ・環境団体との連携、組織化(H18)
- ・環境団体との連携、学習会(H19)
- ・子供たちの農業・農村体験学習(H17)

5. 運動全体の成果と今後の展望

循環かんがいポンプ設置の効果については、用水不足のエリアでも関心が高まってきている。吸い込み口の藻等の対策についての維持管理の増大が造成導入を躊躇する要因になっており、繁殖した藻をポンプが吸い込むことから藻の除去を行う。近畿大学松野教授研究室では、循環かんがいを行うことで施肥量を減らしても、収穫量は減らないとの見解もあり、今後このことの実証のため地元集落の協力を得て展開する。また、“きれいな西の湖をとりもどそう”運動の意識の高まりにより、組合役員に節水に関する取り組みの重要性を認識することができ、分土工別従量制導入の手がかりにすべく活動を継続して行く。

外部運動の思わぬ成果(発展)として、ヨシを中心に活動している、大震災で被災した東北地方の水環境団体とのつながりの一歩もできた。作業所の自立支援に対して間接的ではあるが、積極的に活動していき社会貢献したい。また、浄化再生の特効薬でもある貝などの再生についても漁業関係者・近畿大学との連携を模索して行きたい。

本事業で実施してきたこと以外にも今後の新しい取り組みとして、有事の際の非常食を水土里ネットの事務所で微量ではあるが貯蔵し、水難、消防訓練の場所として今後も提供していき、防災面でも地域に貢献した活動を広げて行く所存である。日本の農業関係の勉強に来ているタイ・チェンマイ大学の学生とも交流して、当水土里ネットが行っている現行の農業水利施設の長所・短所を学生自身の眼で確かめながら学習をしてもらい、小さな国際親善にも協力していく。